狭衣物語の表現機構
——女二宮の物語をめぐって——

鈴木泰恵

一 はじめに

狭衣物語の表現上の特徴は、実に多くの引用を含むことである。その引用がどのような役割を果たしているのかという点から、物語を読み解いていくことができると思う。

「音無の里尋ね出でたらば、いざ給へ」[1]（九一頁）ということばがある。狭衣から飛鳥井に語られたもので、誰にも邪魔されないところでこの恋を継続しよう、という内容を伝えている。だが、「音無の里」は「恋ひ侘びぬ音をだに泣かむ声たてていづこなるらむ音無の里」（拾遺集・読人知らず）を引歌とすることから、狭衣のことばの裏側に、恋の憂悶を湛え、人知れぬところで泣くよりほかないイメージを広げてしまう。狭衣の言わんとする内容よりも、こうしたイメージが飛鳥井をとらえ、流離や出家を思い描かせ、恋を終わらせようと思いつめさせていく。素姓を明らかにせず、虚実をないまぜて逢瀬を重ねる狭衣への、不信と恋情にひき裂かれる飛鳥井を、突き動かすのは、インパクトの強い、しかも多義的な引用の、その悲しい文脈なのである。つまり、錯綜する心情からは必然化しえないような飛鳥井のありようを、多義的なことばの力が推し出し、必然化しているのである。[2]

本稿はこのようなことばの力に注目して、狭衣と女二宮の物語を読み解いてみたい。狭衣は女二宮降嫁の内意を受けるや「いろいろに重ねては着じ」（五二頁）と、源氏宮への一途な思いを確立し、かつ女二宮に恋を仕掛けた後も、煮え切らない態度をとりつづけるのだから、その逢瀬はいかにも理不尽で、一時の情動に基づくとしか思われない。[3] しかし物語は、それを狭衣の突発的な惑乱によるものとして処理し去っているわけではないようだ。構造や主題という長い射程でとらえられる意義とは別に、物語進行現在において、多義的なことばが付与する必然性や論理性を読みとることができる。以上の点を明らかにし、多義的なことばを豊富にとりこんだ狭衣物語の表現機構を見取ってみたいと思う。さらに、表現性に規定される物語の特質をとらえて、源氏物語に多くを借りる狭衣物語がいかに源氏物語と隔たっていくのかに、少し

でも触れてみたいと思う。

二　女二宮と源氏宮

狭衣はある夜、女二宮方に仕える中納言内侍を訪れるのだが、内侍は不在だった。そこに流れる琴の音にひかれて、女二宮に近づき逢瀬がもたれる。物語は二人の逢瀬が偶発的な事件であるかのように状況を設定する。しかし一方では、この逢瀬を、狭衣のやむことのない源氏宮恋慕と深く切り結んで必然化すべく、多義的なことばによって、この時の女二宮がどのような存在であるのかを限定している。

Ⅰ　一重の御衣もいたく綻びてあらはに、をかしげなる御手あたり・御身なり・肌つき、「ことわり過ぎてならべつべし」と、上の御覧ぜられけん我が身も、いと心劣りせらるるにも、かの室の八島の煙焚きそめし折の御腕思ひ出でられて、「こはいかにしつるぞ。もし気色見る人もありて召し寄せられなば、年比の思ひはかたがたにいたづらにてやみぬべきか。…中略…此御心にも人知れず思し嘆かれんさま」など思すに、味気なく涙落ちぬべくて、心強く思しのかるれど、後世の山も知りがたう、美しき御有様の近まさりに、いかが思しなり給ひけん。（一三〇頁）

「をかしげなる御手あたり・御身なり・肌つき」をとらえる狭衣の感覚から、「いかが思しなり給ひけん」の草子地に閉じられる、この逢瀬の山場ともいうべき部分は、理性を押し曲げて発露する狭衣の情動を、余すところなく描きとっている。理性というのは、女二宮と最も接近するさなかに「かの室の八島……」と、源氏宮を思いおこし、「こはいかにしつるぞ」以下、この逢瀬が源氏宮恋慕を挫折させるものだと自らに言い聞かせ、「心強く思しのかるれど」と、思いを醒まそうとする様子を指す。感情と理性、あるいは女二宮と源氏宮という対立的な女性の間を大きく揺れ動きながら、惑乱の中で情動を迸らせた逢瀬であるととらえられるのだが、「こはいかにしつるぞ」以下の、思い醒まそうとする理性に転回する契機となる「かの室の八島の煙焚きそめし折の御腕」の回想は両義的である。

Ⅱ　よしさらば昔の跡を尋ね見よ我のみ迷ふ恋の道かは

と言ひやらず、涙のほろほろとこぼるるをだに、「怪し」と思すに、御手をとらへて…中略…とらへ給へる腕にやがて俯し給へるけはひ…中略…ただうち見たてまつるよりも、近まさりは今少し類なくおぼえ給ふに、心もいとど惑ひはてて…中略…

いかばかり思ひこがれて年経やと室の八島の煙にも問へ（五五〜五六頁）

これが引用Ⅰで「かの室の八島の煙焚きそめし折」と回想された時点の様子である。「室の八島の煙」ということばの重なりばかりでなく、それが思いを伝える標識として知られた歌語であってみれば、初めて恋慕を告げたこの時のことが「かの室の八島の煙焚きそめし折」として、明確にとりこまれてくる(4)。さて、狭衣が思いおこした「御腕」（引用Ⅰ）とは当引用部の「御手」「とらえ給へる腕」で、その「腕」とそこに俯す源氏宮の様子こそがいよ

いよ狭衣の心を掻き乱し、「いかばかり思ひこがれて」と、恋情を訴えさせてしまう。何分、白昼のことであり人も近づいてきたので、訴えはそれなりになるのだが、物語を通じてこの時が、狭衣と源氏宮の最も接近した瞬間、最も昂揚した瞬間であって、狭衣には逢瀬に等しいと指摘されてもいる。(5) そういう瞬間の「御腕」が女二宮の感触から思いおこされたというこの回想は、だから、単にあのすばらしい源氏宮への恋を挫折させることになるという理性を呼び覚ますばかりでなく、一方では、感触を重ね合わせるとともに、その折の煮詰まった感情、果たしえなかった源氏宮への願望を、眼前の女二宮の上にオーバーラップさせ、狭衣の情動を増幅させたであろうとの解釈も、容易に成り立たせてくる。このように「かの室の八島の煙焚きそめし折の御腕」ということばは、源氏宮に対する恋慕を漠然とたぐりよせるものではなく、歌語を含んでより明確な物語内引用となることで、両者を対立的にとらえる表層の文脈を裏切り、この時の女二宮が、源氏宮の身がわりとなった側面をもつこと、すなわち、広義における形代性を担ったことをも示しているのだと思われる。(6)

それはまた、女二宮を垣間見ながら聞く女房たちのうわさ話に、「蓬が門」ということばが挿しはさまれることからも窺える。「蓬が門」とは、端午の節会の前日、路傍で女から詠みかけられた歌の一句である。そのときはさして興味も湧かず歌を返すにとどめたが、後に尋ねさせてみるとこの「蓬が門」の女は姿を消していた。路傍での贈答から改めて女の許を尋ねさせるまでの過程に介在するのが、源氏宮への恋訴とそれによる源氏宮との隔たりである。「ありし室の八島の後は、宮のこよなく伏目になり給へる」(六三頁)のがつらく、「猶おのづからの慰めもやと、しのび歩きに心を入れ」(六三頁)る狭衣の心の傾きが、「蓬が門」の女を改めて求める経緯を説明づけている。

ところで、狭衣の心にはもうひとり理想的な女性がいる。母堀川上である。「あくまでらうたげに親と見えさせ給はず」(六一頁)と眺められ、多く源氏宮と一対をなして、狭衣の視線にその美しさが認められている。さらに堀川上は前斎宮という設定であり、後に源氏宮が斎院になることを勘案すると、両者は共通性を付与されているといえるだろう。そのあたりからも狭衣の理想の女性として位置づけられてくる。さて、その母を掌中に収める父堀川大殿が恋愛経験を披瀝し、結婚には向かないが「葎の中にて見えし人」に、意外にすばらしい女性がいたと、帚木巻さながらの品定めをしてみせる。母という女性の存在に裏打ちされた父大殿のことばは、狭衣に「蔭の小草の露よりほかは知る人なからん」(六三頁)というような女への興味を植えつけてしまう。その結果、狭衣は源氏宮へのかなわぬ思いをくすぶらせながら、「葎の中」の女、「蔭の小草」のような女に、慰めを求めてしのび歩きを重ねるのである。以上のことを押えると、改めて求めた「蓬が門」の女は「葎」「蔭の小草」ということばと響き合いながら、明確に慰めの対象として位置づけられる。ここで狭衣にとっての慰めの意味をもう少し明確にしておきたい。しのび歩きの甲斐もなく、また、「蓬が門」の女の消息も知れず、慰めようもない狭衣の心情を、物語は「ほのかなりし御腕の手当りに似るものなきにや、姨捨山

ざわりなかりける」（六三頁）と表し、説明を加えている。つまり、狭衣が慰めとして求めるもの、すなわち「蓬が門」の女に求めるものは、源氏宮の「腕」を彷彿とさせる感触だったということを跡づけていると思われる。「蓬が門」の女は、その可能性を秘めたまま、物語から姿を消したのである。

そして逢瀬の夜、女二宮を垣間見ている場面で、「蓬が門」のうわさ話がさし挟まれる。物語は「をかし」と思う狭衣の興味―源氏宮の「腕」の感触を求める心情と結びついた興味―を、眼前に見る女二宮への「ただ見たてまつり出でんこと口惜しうぞおぼえ給ひける」（一二九頁）という心情に移行させている。「蓬が門」ということばは、戸を閉じられ、出るに出られず垣間見をしていた狭衣が、急速に女二宮に接近する事情を、単に女二宮の美しさに惑乱したというのではなく、源氏宮の「腕」の感触を求める情動が呼びおこされ、それを眼前の女二宮に向けたのだと説明づけるものなのではあるまいか。この時点ですでに、女二宮は源氏宮への情動を重ね合わされた、身がわりの形代として、あるいはその可能性を担う存在として示されているのだと思われる。

むしろ、「蓬が門」の女への興味と奇妙に重なりながら、「かの室の八島の煙焚きそめし折の御腕思ひ出でられて」なされた逢瀬だと脈絡のついてくるときに、より一層、女二宮は、源氏宮への情動を重ね合わされた形代的存在として、明示されるであろう。こうして、一瞬の情動に駆られたようになされる女二宮との逢瀬も、これらのことばによって、一途に思う源氏宮と結びつけられ、説明づけられているのである。

それにしても、どうして女二宮は源氏宮の身がわり、あるいは形代としての側面を担わされうるのかを考えたい。

三　女二宮と身のしろ衣

たとえば源氏物語において、光源氏が藤壺への思いを込めて若紫を求めるとき、そして薫が浮舟をとらえて大君に結びつけるとき、もちろん両者の愛情の質はひどく異なるけれども、ある人物への思いを、他の人物において実現しようとするとき、〈ゆかり〉である以外に、物語はきわめて明快な根拠づけを行っている。その根拠とは「似ている」と見る視線と、それに基づく光源氏や薫の感動である。

限りなう心を尽くしきこゆる人に、いとよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。(7)

（若紫・一―二八二頁）

かれをも、くはしくつくづくと見たまはざりし御顔なれど、これを見るにつけて、ただそれと思ひ出でらるるに、例の、涙落ちぬ。

（宿木・五―四八〇頁）

求めえぬ人の面影を見出し、それに涙する感動を描く短い行文が、若紫や浮舟の登場を促す人物の内的必然性、すなわち物語展開の必然性を設定する重要な鍵になる。女二宮の場合、その感触に源氏宮との重なりがあるけれど、狭衣の感動は描かれず、むしろ、引用Iで見たように、思い醒まそうとする（源氏宮に回帰しようとする）心情表現の文脈を生み出していく。つまり「かの室の八島の煙焚きそめし折の御腕」ということばは、その感触において

女二宮を源氏宮に結びつけるのだが、思いを託しうる同質のものだととらえ感動するという、逢瀬に向けての内的必然性を狭衣には設定しないのである。だから、狭衣の心情に即して読むかぎり、どうしてもこの逢瀬は無根拠で「官能的欲求」[8]の噴出として位置づけられてしまう。しかし、やはり物語の多義的なことばは、女二宮が源氏宮への情動をうけおう形代的存在であることを論理化し、この逢瀬を現出させた必然性を敷設しているようだ。

「蓬が門」のうわさ話の後、眼前の女二宮に話しかける狭衣のことばは、またもや物語の早い時点をたぐり寄せる。

Ⅲ「かの夜半の身のしろ衣、さりとも思しかへさんやは」と、
頼まれ侍れども、心のみ乱れまさりてなん。……（一二九頁）

宮に近づくことを正当化するように、帝の内意をほのめかすのだが、「かの夜半の身のしろ衣」は、天稚御子事件直後の帝と狭衣との贈答の場をたぐり寄せ、この逢瀬のありようを、さらには女二宮の物語をも必然化するようだ。

Ⅳ　身のしろも我脱ぎ着せんかへしつと思ひな侘びそ天の羽
衣
仰せらるる御気色、心ときめきせられておぼゆることあれど、
「いでや、武蔵野のわたりの夜の衣ならば、げに、かへまさりもやおぼえまし」と、思ひぐまなき心地すれどもいたく畏まりて、
紫の身のしろ衣それならば少女の袖にまさりこそせめ
と申されぬるも、何とか聞き分かせ給はん。いずれも昔の御ゆかり離れぬ御仲どもなれば、いとよかりけり。
（五〇―五一頁）

帝の歌に詠みこまれる「身のしろ」とは、「天の羽衣」すなわち天稚御子の身がわりに、愛娘の女二宮を降嫁させようという帝の意志の隠喩である。ここでも女二宮は天稚御子の「身のしろ」として、すでに〈身がわり〉の者という質に限定されている。

一方、狭衣の返しにある「紫の身のしろ衣」は、その前の「武蔵野のわたりの夜の衣」を含む心内のことばと響き合って、女二宮ゆかりの源氏宮を指す[9]。事実、源氏宮と女二宮とは叔母・姪の関係にある。

紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る
（古今・雑上・読人不知）

この有名な古今集歌をふまえる源氏物語・若紫巻の光源氏の歌に

・手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草
（一―三二四頁）
・ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを
（一―三三三頁）

がある。藤壺のゆかり（姪）で、まだ共寝をしていない若紫を思う歌だが、「紫」「武蔵野の露わけわぶる草」は叔母の藤壺を指す。古今集、源氏物語を重層的にふまえる狭衣物語の、「紫の身のしろ衣」が「武蔵野のわたりの夜の衣」と響き合うとき、指し示すのは、狭衣にではなく、女二宮にこそ〈ゆかり〉の、叔母源氏宮であり、それへの恋着を象る歌意をあらわにすると考えられる。

もちろん、藤壺・若紫の関係を、そのまま源氏宮・女二宮にもちこむことはできない。なによりも叔母である源氏宮恋慕に限定され、藤壺→若紫と通融する情の回路が源氏宮・女二宮の間には開かれていないのである。しかし、女二宮降嫁をほのめかされて源氏宮を思う狭衣のことばが、古今集歌、若紫巻の物語歌に通じるとき、それは源氏宮と女二宮とが〈ゆかり〉であることを明確に打ち出すのではあるまいか。

ところで、その返しを聞く帝はどうかというと、そういう狭衣の思いは「くちなし」(三〇頁)の恋であり、狭衣の心ひとつに納まって他者には知れないものだから、「いづれも昔の御ゆかり離れぬ御仲どもなれば、いとよかりけり」の草子地が説明するように、源氏宮同様、狭衣とはいとこの女二宮を「身のしろ」にいただきたいの意で受けとられるであろう。源氏宮はこの贈答の場では問題にされていないので、女二宮と狭衣とが〈ゆかり〉であるというラインしかここにはない。つまり狭衣の歌の「紫の身のしろ衣」ということばは、贈答という場に規制されるときと、心内の表白であるときとで、その意味を二重化されるのである。

このように多義的なことばの意味作用を受けて、狭衣と向い合う以前に女二宮は、源氏宮〈ゆかり〉の女として、かつまた〈身がわり〉の「身のしろ衣」として、すでに人物像を象られていると見てよいのではあるまいか。そして、この場での「身のしろ衣」とは天稚御子の〈身がわり〉ということではあるが、〈ゆかり〉であり〈身がわり〉であるという位置づけには、「紫」「武蔵野」という語のレベルを超えて、〈ゆかり〉であり〈形代〉であった浮舟がむしろたぐり寄せられてくるであろう。引用Ⅲの「かの夜半の身のしろ衣」はこのように限定された女二宮を逆照射し、源氏宮への情動をうけおう形代的存在となることを、源氏物語にある〈ゆかり〉〈形代〉の論理を透視させて、〈ゆかり〉であるから、〈身がわり〉の「身のしろ衣」であるからと、説明づけ必然化しているといえよう。一歩進めていえば、引用Ⅳにおいて、「身のしろ」から「紫の身のしろ衣」を引き出していく過程での、源氏物語を映発することばの多義化作用そのものがすでに、この逢瀬―女二宮を形代的存在として源氏宮への情動をうけおわせたこの逢瀬―を推し出し、さらには、この逢瀬に始まり徐々に比重を増していく女二宮物語を、変則的な〈ゆかり〉の物語として推し出す力になったのではないだろうか。それは、多義化することばの作用に引き据えられる源氏物語の〈ゆかり〉〈形代〉の論理が、人物の内的必然性をさしおいて、物語を説明づけたり、あるいは推し出したりする力をもつのではないか、ということでもある。そこには、ことばの力をこそ糧とする物語の一面のありようが見えるのではないか。狭衣物語のことばは、ただ源氏物語の雰囲気を醸し出して美的言語世界を形象するだけの、スタティックなものとは少し相貌を異にしているのだと思う。狭衣物語はことばの多義性を方法的にとり込むことで、人物の心情からは説明しがたく、一見、無根拠と思われる事態―それはまた構造上、主題形成上、要請された事態でもある―を、心情とは別に、論理化し必然化して物語を支える表現機構を有しているのではないだろうか。

しかし、人物の心情とは別に、ことばの力がひとつの事態を必然化し、促していくことによって、心情表現の文脈に表れる主体的自我というようなものと、ことばとの葛藤が生じてしまう。そして、主体的自我はつき崩され、物語内で孤立しているようだ。人物論的な批判をたぐり寄せる、狭衣の人物造形の問題も、こうした事情によるように思う。次節では少し角度をかえて、主体的に択りとられる人物のありように、ことばがどのような力を加えてしまったかを考察し、多義的で、多様なイメージをもつことばに寄りかかるこの物語が、源氏物語に多くを借りながら、いかに源氏物語から隔たった特質を示すのかを考えてみたい。

四　女二宮と女郎花

この逢瀬の後、女二宮は懐胎・出産、それを苦にした母大宮の死と、めまぐるしい体験を経て出家へと向う。ことに出家以後は、狭衣を遠ざけ、心に思うことを手習歌にし、それも狭衣の手に渡ると知るや、折々生み出される独詠歌を心中深く沈めて、かつての日々を宮なりにとらえ直しながら仏道修行に心を寄せていく。そのありようは、ことばの多義性に裏づけられ促された理不尽な生を突き放し、ことばの呪縛から解放されようとするものだといえよう。そしてその姿はただちに源氏物語の浮舟を映発する。

浮舟もまた「人形」「形代」「なでもの」と言いなされ、その属性を纏って物語を生きた人物である。だが、入水の後、手習巻を通じて吐き出される浮舟のことばが、切なく過去を思い返しながらも、

・なきものに身をも人をも思ひつつ捨ててし世をぞさらに捨てつる　（六―三二九頁）

・限りとぞ思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな　（六―三二九頁）

と、入水へと向わざるをえなかった生を、換言すればことばに呪縛された生を突き放そうとする意志を獲得したとき、その生は「夢」の領域にくくりだされていった。(10) 夢浮橋巻で、薫の手紙に返答をするよう迫る妹尼に「昔のこと思ひ出づれど、さらにおぼゆることもなく、あやしう、いかなりける夢にか、とのみ心もえずなむ」（六―三七九頁）と言う浮舟のことばは、場の状況を超えて、ことばに呪縛された生を払いのけようとする意志の現れに見える。沈黙を持ち帰る小君を前に、薫は自らの経験に照らして「人の隠しすゑたるにやあらむ」（六―三八一頁）と思うしかないのだと物語は語る。「人形」「形代」「なでもの」ということばの中で、薫のとらえた浮舟がいかに遠くに行ってしまったかを、物語は明確に示しているということだろう。

女二宮も母大宮の死を機に「夢のさむる心地して」（二六一頁）と、ことばが必然的に促した自らの生を「夢」の領域に押し込み、他者に、とりわけ狭衣に対してはことばを閉ざしたまま物語にあり続ける。それが狭衣との関わりで、どのような意味を担うかはともかく、女二宮もまた浮舟と同様、ことばの呪縛を払いのけようとする生を刻んでいるのだといえよう。物語はそんな女二宮を、狭衣心中詠のことばを通じて「女郎花」というイメージにくくって物語を終える。源氏物語との終末の違いから、女二宮という存

在とことばとの関わりを考えてみたい。

物語の終末、嵯峨院に行幸した狭衣は、相変わらず女二宮とはことばを交わすこともできず、思いを残して帰途につく。

たちかへり折らで過ぎ憂き女郎花なほやすらはん霧の籬に　(四六六頁)

そのときの心中詠である。「女郎花」は女二宮をたぐえており、指摘されるように、物語冒頭の「山吹」と、くちなし色で首尾呼応する。[11] 冒頭の「山吹」は「藤」とともに狭衣が源氏宮にさし出し、源氏宮に選ばれた花である。そこから狭衣は「いかにせん言はぬ色なる花なれば心の中を知る人もなし」(三〇頁) と、くちなしの(言はぬ) 恋をとりあえず自認するのだが、晩春の情景に浮かぶ「山吹」にはまた、移ろいのイメージが醸し出される。

・吉野川岸の山吹吹く風に底の影さへうつろひにけり　(古今・春下・貫之)

・しのびかねなきて蛙の惜しむをも知らずうつろふ山吹の花　(後撰・春下・読人不知)

・物も言はでながめてぞふる山吹の花に心ぞうつろひぬらん　(拾遺・春・元輔)

・沢水にかはづ鳴くなり山吹のうつろふ影や底に見ゆらむ　(拾遺・春・読人不知)

源氏宮の択り取った「山吹」に狭衣が自らの恋を象徴したとき、表層の「言はぬ」恋の裏側に「移ろふ」恋のイメージが広がる。くちなし色で結ばれ、晩春から晩秋へ「山吹」から「女郎花」への首尾の呼応に、源氏宮から相対的に比重を増す女二宮へと、狭衣の恋情が移っていったことも象徴的に映しだされるのであろう。[12]

では、「山吹」からの移ろいを受けとり、女二宮のたぐえられた「女郎花」のイメージをとらえてみたい。三代集時代頻繁に詠まれた和歌の伝統に照らしても、また狭衣歌「折らで過ぎ憂き」を見ても、たしかに男の恋情をそそる女にたとえられた花と押えられる。[13]

・秋来れば野辺にたはるる女郎花いづれの人か摘まで見るべき　(古今・俳諧・読人不知)

・女郎花にほふ盛りを見る時ぞわがおいらくはくやしかりける　(後撰・秋中・読人不知)

・狩りにとて我はきつれど女郎花見るに心ぞ思ひつきぬる　(拾遺・秋・貫之)

さらにこの女郎花がくちなし色であることを意識して詠む例もある。[14]

・名にめでて折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな　(古今・秋上・遍昭)

・くちなしの色をぞたのむ女郎花はなにめでつと人に語るな　(拾遺・秋・実頼)

・雲の立つうりふの山の女郎花くちなし色をこひぞわづらふ　(夫木・秋二・小大君)

こうしたイメージをとらえてみると、女二宮が逢瀬から懐胎・出産という事態に見舞われても、それらについて何ひとつ語らず、以後もほとんど内向的に沈黙していることなどを、「女郎花」のたとえは、宮のその折々の心情とは別に、歌に形象された花の属

性の中に論理化してしまうようだ。またそういう属性をもつ故に、一層、恋情をそそる存在としてイメージ化してもいるようだ。

移ろいのイメージを潜める「山吹」とくちなし色で結ばれる「女郎花」とに首尾が呼応することで、もう一度、女二宮が源氏宮への恋情を引き継いだのだということを、すなわち、形代的に狭衣と関わった姪女二宮の存在が徐々に比重を増す一種の〈ゆかり〉の物語をイメージさせるであろう。また最後に「女郎花」とたとえられることで、女二宮は「女郎花」の花のように、狭衣の恋情をかきたててやまぬ存在としてイメージ化されてしまうであろうし、出家以後のありようは、宮の心情とは別に、くちなし色の花の属性において論理化され、それ故になお狭衣を引きつけていくのだと異化されてしまうであろう。このように歌の伝統にしっかりと裏打ちされて、イメージを浮かべる「女郎花」に、最後に女二宮をたぐえてしまうことは、ことばに呪縛された生から抜け出そうとする女二宮のこれまでの営為、それ故の沈黙を奇妙に韜晦してしまうのではないだろうか。夢浮橋巻が、薫による浮舟の統合、歌語等によるある種のイメージへの総括的統合を、すでに果たしえないところに二人を隔て、はなはだしく的をはずした薫の思い違いにそれを刻印することで、浮舟という存在は自立したといえよう。しかし、女二宮はそのありようをあまりにうまく掬いあげるような「女郎花」に還元統合されることで、浮舟のような存在として自立することを曖昧にされたのではないか。「女郎花」と見る狭衣の視線に犯され、位置づけなおされることで、浮舟を二重映しにする主体的自我（厭世意識）の自立は影を投げかけられ、内的な存在として救済のテーマを追いつめる浮舟とはひどくかけはなれた存在となっているのではないだろうか。

五　結び

狭衣物語のことばはスタティックに先行文学世界を誘引し「文学的情調をまとった美的な世界」の構築[15]を専らにするのでもあるまい。ことばの力が、物語を論理化し必然化する反面、登場人物の心情に仮構される主体的自我というようなものを、激しく侵蝕あるいは解体していく運動を見取ることができるのではないか。そして、人物の内面をなし崩したり、置き去りにすることばの運動によって、人物の内なる世界が、物語られていく外の世界とは遠く隔てられ、主体というものをいかんともしがたく突き放し、無力化するところに、源氏物語に多くを借りる狭衣物語の、源氏物語との大きな径庭があるといえよう。

また、その無力な主体をさらけ出してなされる女二宮との逢瀬（若宮出生）が大きなファクターとなって転がりこみ、内面においてさらに相対化される帝位―権威―の質の、すさまじいほどのナンセンスを見ても、あるいは主体的自我の寄りすがる出家に象徴されるはずの宗教的権威―源氏物語において、藤壺の出家が光源氏との関係を変質させ、浮舟の出家が中将との縁談の壁となりえたような、反世俗の宗教的権威―を、本質的な救済云々を問う以前に、世俗的な視線が簡単に踏みにじっていくのを見ても、狭衣物語は源氏物語やまして古代的物語とは遠い存在なのではないか。そこには、ことばに対してより多くの信頼を置き、主体とひきか

えに、時代の権威とおぼしいものを、軽々と踏みこえていこうとするシニカルな姿勢があるといえるだろう。

源氏物語に多くを借りながら物語を支えた表現機構自体が、狭衣物語を源氏物語から乖離させていく契機となっていることを考えてみたが、さらに分析を重ねて、物語とことばのダイナミックな関係をとらえていきたいと思う。とりわけ、こうしたことばの力を借りて、物語を統合していく、狭衣の源氏宮に向ける情念（情動ではなく情念というべきもの）の質や、それを向けられる源氏宮のありようについては、後稿に譲りたいと思う。

注

（1）本文は岩波日本古典文学大系を用いてその頁数を示し、適宜若干の表記を改めた。また、同系深川本を併せ見て本論に変更を促す異同のないことを確認した。

（2）拙稿「飛鳥井物語の形象とことば―ことばのイメージ連鎖をめぐって―」（『中古文学論攷』第10号平成元年12月）が同様の観点から「飛鳥井物語」の考察を試みているので、併せてご参照いただければ幸甚である。

（3）本稿では、精神分析学からことばを借り、欲望ないしは欲動エネルギーといった意味で用いている。

（4）「いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の煙ならでは」（詞花集・恋上・藤原定方）を引く。女二宮との逢瀬に到る間にもう一ケ所この場面を「室の八島」と表している（六三頁）。

（5）井上真弓「『狭衣物語』の引用・断面―「夢のわたりの浮橋」を軸として―」（『日本文学』昭和62年4月）

（6）森下純昭「狭衣物語と山吹」（『岐阜大学教養部研究報告』昭和52年2月）も結婚の意志のない色情面での身がわりだと指摘する。狭衣の意志とは別に、物語のことばによる位置づけを本稿では問題にしたい。

（7）本文は小学館日本古典文学全集に拠り、その巻数と頁数を示す。

（8）そうした指摘は多いが、森下純昭「狭衣物語の人物関係―「らうたし・らうたげ」をめぐって」（『岐阜大学国語国文学』昭和53年3月）は、むしろ狭衣の恋の内実を「官能的欲求」に見て、各女君恋慕を一貫してとらえようとする。氏の御論より多くの示唆を受けたが、そのようにしか思えない部分について問い直してみようと思う。

（9）大系頭注では狭衣の〈ゆかり〉としているが、従わない。

（10）髙橋亨「存在感覚の思想―〈浮舟〉について」（『源氏物語の対位法』昭和57年刊）

（11）森下純昭（6）前掲論文

（12）久下晴康「『狭衣物語』終末部の考察―朝顔と女郎花をめぐって」（『平安後期物語の研究　狭衣浜松』昭和59年新典社刊）は、この歌が、源氏物語・夕顔巻の「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎ憂き今朝の朝顔」を引き「朝顔」が「女郎花」になったことで、狭衣の関心が女二宮に移ったことを示し、二人の結婚を象徴的に認証しているとする。本稿はあくまでも作品内での源氏宮→女二宮を「山吹」→「女郎花」の首尾の呼応がイメージ化すると見る。

（13）森下純昭（6）前掲論文

（14）時代を下ってもこの系譜の歌は散見される。たとえば「咲きにけりくちなし色の女郎花言はねどしるし秋のけしきは」（金葉・秋・源縁法師、二度本一六九、三度本一六三）「声たてて鳴く虫よりも女郎花言はぬ色こそ身にはしみけれ」（夫木・秋二・寂蓮法師）

（15）池田和臣「狭衣物語の修辞機構と表現主体」（『国語と国文学』昭和61年3月）